

神戸女子大学古典芸能研究センター 令和5(2023)年展示

写真展 「郷土の風流踊」

期間: 令和5年7月3日(月)～9月1日(金) 土・日・祝日、8月14日(月)～8月18日(金) 休室  
時間: 午前10時～午後5時 場所: 神戸女子大学古典芸能研究センター展示室

2022年秋、「風流踊」がユネスコの無形文化遺産に登録されました。風流踊とは、衣裳や持ちものに趣向をこらして、歌や笛・太鼓・鉦などの囃子かねに合わせて踊る民俗芸能です。そこには、除災や死者供養、豊作祈願、雨乞いなど、安寧な暮らしを願う人々の祈りが込められています。

兵庫県に伝わる代表的な風流踊には、国の指定を受けた(※1)「阿万の風流大踊小踊」のほか、それに準ずる(※2)「大杉のざんざこ踊」・「但馬の麒麟獅子舞」があります。今回は、古典芸能研究センターにある喜多文庫や西谷勝也氏の調査資料を用いて、兵庫県に伝わる風流踊の写真を中心に、近隣の岡山県や香川県の風流踊も加えて写真で紹介します。この機会に、それぞれの地域に伝わる、人々の願いのこもった伝統芸能「風流踊」をぜひご覧ください。

(※1)「国指定重要無形民俗文化財」全国で43件

(※2)「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」全国で124件

〔展示写真〕

1. 阿万の風流大踊小踊

〔国指定重要無形民俗文化財〕

指定年月日：平成23(2011)年3月9日 所在地：兵庫県南あわじ市阿万上町

雨乞い踊り・百石踊りとも称され、本来は雨乞い祈願時の踊りであったが、現在は亀岡八幡神社の秋季大祭において神社拝殿で踊られている。大踊は、音頭取おんどとりによる歌、拍子木、締太鼓の音楽にのせ、踊り手が2列横隊となり踊る。前列の踊り「前踊り」は扇やチャッキラコと呼ぶ2本の細竹などを手に持ち、子どもが務める。後列の踊り「中踊り」は大うちわを持って大人が踊る。室町時代末期から江戸時代初期にかけて流行した小歌と類似した歌詞が残され、また、ゆったりとした歌と踊りで、古風を残している。一方、小踊は、8名前後の踊り手が横1列に並んで踊る。元禄期以降に流行した歌の歌詞を取り入れて、大踊と比べ軽快な踊り振りをみせる。このような異なる2種類の踊りが伝承され、正面からの観客を意識した隊形で演じられるところに芸能の変遷過程を示し、地域的特色がある。

- 1-1 大踊：扇を持って踊る「前踊り」 昭和42(1967)年9月15日 喜多慶治撮影(喜多文庫)
- 1-2 大踊：大団扇を持って踊る「中踊り」 昭和42(1967)年9月15日 喜多慶治撮影(喜多文庫)
- 1-3 小踊：第一番 神楽踊 昭和42(1967)年9月15日 喜多慶治撮影(喜多文庫)
- 1-4 小踊：第三番 向山踊 昭和37(1962)年 西谷勝也撮影
- 1-5 小踊：第八番 綾踊 昭和37(1962)年 西谷勝也撮影
- 1-6 大踊：前列の「前踊り」と後列の「中踊り」 昭和50(1975)年9月15日 喜多慶治撮影(喜多文庫)
- 1-7 大踊：「中踊り」と囃子方 昭和50(1975)年9月15日 喜多慶治撮影(喜多文庫)
- 1-8 小踊：第一番 神楽舞 昭和50(1975)年9月15日 喜多慶治撮影(喜多文庫)
- 1-9 玉突 昭和50(1975)年9月15日 喜多慶治撮影(喜多文庫)
- 1-10 小踊：第八番 綾踊 昭和50(1975)年9月15日 喜多慶治撮影(喜多文庫)

## 2. 大杉のざんざこ踊

「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」

選択年月日：昭和48（1973）年11月5日 所在地：兵庫県養父郡（現 養父市）大屋町大杉

兵庫県養父郡（現 養父市）大屋町の大杉部落の二宮神社に8月16日奉納される太鼓踊の一種で、「鬼踊」ともいう。踊の構成は、新発意1人、中踊り4人、側踊り50～60人、歌い手6～7人、笛吹き1～2人からなる。新発意は、踊り全体の指揮者で軍配扇を持つ。中踊りは踊りの中心で、背に「うちわ」と称する大幣を負い、腰に太鼓をつけ撥を持つ。側踊りは中踊りを取り巻いて輪舞するもので、腰に太鼓を着け撥を持つ。歌い手は手に五色の幣を持ち、笛は横笛である。踊りは、中踊りを中心に側踊りが円陣をえがき跳躍しながら太鼓を打つ。太鼓踊の一型式を示すもので、地方的特色の顕著なものである。

- 2-1 二宮神社への道行 昭和46(1971)年8月16日 喜多慶治撮影（喜多文庫）
- 2-2 「中踊」は大きなシデ（唐うちわ）を背負う 昭和46(1971)年8月16日 喜多慶治撮影（喜多文庫）
- 2-3 「中踊」4名を「側踊」が囲んで踊る 昭和46(1971)年8月16日 喜多慶治撮影（喜多文庫）
- 2-4 太鼓を打つ「側踊」 昭和46(1971)年8月16日 喜多慶治撮影（喜多文庫）

## 3. 大屋町若杉ざんざか踊

「兵庫県指定無形民俗文化財」

所在地：兵庫県養父郡（現 養父市）大屋町若杉 指定年月日：昭和48（1973）年3月9日

- 3-1 境内での踊（「太鼓」「うちわ」「中踊」） 昭和46(1971)年8月16日 喜多慶治撮影（喜多文庫）
- 3-2 「太鼓」（右）と「うちわ」（左） 昭和46(1971)年8月16日 喜多慶治撮影（喜多文庫）

## 4. 和田山町寺内ざんざか踊

「兵庫県指定無形民俗文化財」

所在地：兵庫県養父郡（現 養父市）大屋町若杉 指定年月日：昭和48（1973）年3月9日

- 4-1 宮入り 昭和40(1965)年7月15日 西谷勝也撮影
- 4-2 うちわを背負う「中踊」（山王神社境内） 昭和40(1965)年7月15日 西谷勝也撮影
- 4-3 光福寺境内前庭での踊 昭和40(1965)年7月15日 西谷勝也撮影
- 4-4 輪の中央で踊る「中踊」（山王神社境内） 昭和46(1971)年7月15日 喜多慶治撮影（喜多文庫）
- 4-5 うちわを背負う「中踊」2名 昭和46(1971)年7月15日 喜多慶治撮影（喜多文庫）
- 4-6 2名の「しんぼし」・踊る「中踊」 昭和46(1971)年7月15日 喜多慶治撮影（喜多文庫）

## 5. 八鹿町九鹿ざんざか踊

「兵庫県指定無形民俗文化財」

所在地：兵庫県養父郡（現 養父市）八鹿町九鹿 指定年月日：昭和43（1968）年3月29日

- 5-1 シデを背負う「太鼓」と軍配を持つ「うちわ」 昭和36(1961)年7月15日 喜多慶治撮影（喜多文庫）
- 5-2 太夫が謡い、「太鼓」・「うちわ」が舞う 昭和36(1961)年7月15日 喜多慶治撮影（喜多文庫）

## 6. 浜坂町久谷ざんざか踊

「兵庫県指定無形民俗文化財」

所在地：兵庫県美方郡浜坂町（現 新温泉町）久谷 指定年月日：昭和43（1968）年3月29日

6-1 笠を被り締太鼓をつけた踊り子 昭和45(1970)年9月16日 喜多慶治撮影 (喜多文庫)

6-2 踊り子の踊 昭和45(1970)年9月16日 喜多慶治撮影 (喜多文庫)

## 7. 但馬の麒麟獅子舞

「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」

選択年月日：平成21(2009)年3月11日 所在地：兵庫県美方郡浜坂町(浜坂/居組)

但馬の麒麟獅子舞は、麒麟を象<sup>かたど</sup>ったとされる頭<sup>かしら</sup>をいただき、胴幕に大人二人が入って一頭の麒麟となって舞う民俗芸能である。麒麟の頭を用いることやゆったりとした動き、太鼓、笛、ジャンジャン(銅拍子<sup>どびょうし</sup>)を用いた軽快な囃子などに特色がある。

旧但馬国にあたる兵庫県の西北部の新温泉町、香美<sup>かみちよう</sup>町に分布しており、地元の神社の祭礼において神前のほか、氏子の家々を門付けして回る。

麒麟獅子舞は、一頭または二頭で舞われ、地を這うようにゆっくり頭を回したり、ひねったり、伸び上がるように頭を上げたりする動作が特徴的である。獅子の他には、多くの場合赤い猩<sup>しょうじよう</sup>々面に赤い衣裳や髪<sup>かみ</sup>の、猩<sup>しょうじよう</sup>々が一人つく。演奏される囃子は、鉦<sup>かね</sup>を使用する因幡地方の囃子と比べて比較的テンポが早く、ジャンジャン(銅拍子)が賑やかに打たれる。

麒麟獅子舞は、鳥取県東部(因幡地方)から兵庫県西北部(但馬地方)にかけて分布しており、因幡地方では楽器に鉦を使うのに対し、但馬地方ではジャンジャンを使うことが多いなど、異なった伝承が見られ貴重である。

7-1 家々を門祓いして廻る門付け 浜坂宇都野神社麒麟獅子舞 昭和47(1972)年7月18日 喜多慶治撮影 (喜多文庫)

7-2 本舞に登場する露払い役の「猩<sup>しょうじよう</sup>々」 同上 昭和47(1972)年7月18日 喜多慶治撮影 (喜多文庫)

7-3 神前の砂浜で舞う獅子頭 同上 昭和47(1972)年7月18日 喜多慶治撮影 (喜多文庫)

7-4 神前で奉納する本舞(橋の舞) 同上 昭和47(1972)年7月18日 喜多慶治撮影 (喜多文庫)

## 8. 綾子踊

「国指定重要無形民俗文化財」

指定年月日：昭和51(1976)年5月4日 所在地：香川県仲多度郡まんのう町

保護団体名：佐文綾子踊保存会

仲多度郡仲南町(現 まんのう町)佐文に伝承される風流の一種で、雨乞いの祈願をその本旨とした念仏踊風のものである。夏の早ばつ時に行われるため不定期であるが、おおよそ八月中・下旬に行われる。踊りは、まず朝日山の竜王祠前で演じられ、次いで賀茂神社前で行う。

その次第は、長刀持と棒持が踊場の中央で口上を述べて踊り、次に芸司の口上のあと子踊、大踊、側踊の組が並んで踊る。曲目には、「水の踊」「四国踊」「綾子踊」「忍びの踊」など十二曲があり、それぞれの小歌に合わせて踊を展開する。その芸態に初期歌舞伎踊風の面影を遺している。

8-1 綾子踊(於 第40回全国民俗芸能大会) 平成2(1990)年11月24日 喜多慶治撮影 (喜多文庫)

8-2 水の舞 平成22(2010)年9月5日 川端咲子撮影

8-3 忍びの踊 平成22(2010)年9月5日 川端咲子撮影

8-4 綾子踊 平成22(2010)年9月5日 川端咲子撮影

8-5 行列を組み境内へ入る(入庭<sup>いりば</sup>) 平成22(2010)年9月5日 川端咲子撮影

8-6 口上 平成22(2010)年9月5日 川端咲子撮影

8-7 棒持と長刀持が場を清める 平成22(2010)年9月5日 川端咲子撮影

8-8 側踊<sup>がわおどり</sup>の組の踊り 平成22(2010)年9月5日 川端咲子撮影

## 9. 滝宮の念仏踊

「国指定重要無形民俗文化財」

指定年月日：昭和52（1977）年5月17日 所在地：香川県綾歌郡綾川町  
保護団体名：滝宮念仏踊保存会

この芸能は、念仏踊の一種であり、滝宮神社、滝宮天満宮の社前で踊られるのを恒例とするが、旱魃<sup>かんぼつ</sup>の年には、雨乞いを祈願して臨時に踊られることもある。伝承では、菅原道真が当地の国司であった時、雨乞いの願が成就して大雨が降り、喜んだ住民の歓喜踊躍したのがこの踊のはじまりともいい、また道真の亡魂を慰めるため念仏を唱えるようになったともいう。

芸態は、世話役、下知役<sup>げち</sup>、子踊、外鉦、笛、太鼓、鼓、法螺貝、願成就役などの各役が列を正して道中芸を示し、神社に練り込んだ後、下知役の合図で大団扇<sup>うちわ</sup>を振りかざして、願成就役の発声で「ナッバイドオヤ」と唱えながら囃子に合わせて踊る。

- 9-1 「下知」<sup>げんじ</sup>の踊 昭和63(1988)年8月25日 喜多慶治撮影（喜多文庫）
- 9-2 3組が揃って踊る総組踊の囃子方 昭和63(1988)年8月25日 喜多慶治撮影（喜多文庫）
- 9-3 3組の「下知」<sup>げんじ</sup>が揃って踊る 昭和63(1988)年8月25日 喜多慶治撮影（喜多文庫）
- 9-4 天満宮への道行（宮入り） 昭和63(1988)年8月25日 喜多慶治撮影（喜多文庫）
- 9-5 甲冑をつけた警固と太鼓打・中鉦 平成23(2011)年8月25日 川端咲子撮影
- 9-6 3組の「下知」<sup>げんじ</sup>が揃って踊る 平成23(2011)年8月25日 川端咲子撮影
- 9-7 奴組の入庭・奉納（滝宮天満宮） 平成23(2011)年8月25日 川端咲子撮影
- 9-8 長刀の奉納（滝宮天満宮） 平成23(2011)年8月25日 川端咲子撮影

## 10. 白石踊

「国指定重要無形民俗文化財」

指定年月日：昭和51（1976）年5月4日 所在地：岡山県笠岡市  
保護団体名：白石踊会

笠岡市白石島に伝承される盆踊の一種で、源平両軍の戦死者の霊を慰めるために始められたものといわれ、8月13日から15日まで演じられる。

浜辺に仕組んだ櫓をめぐって、島内の老若男女が大太鼓と音頭に合せ、梵(ぼん)天(てん)や団扇(うちわ)などを手にして踊る。同じ踊りの輪のなかに男踊、女踊、笠踊、二つ拍子(娘踊)などの組があり、一つの太鼓、一つの音頭で各組各様の踊りを踊る演技・演出法は他に類例も少なく、芸能史的に貴重なものである。また、音頭は口説<sup>くどき</sup>(※)で、「さいの河原」「那須の与市」「お夏清十郎」「お半長右衛門」など十余曲。

※「口説」…口説歌。長編の叙事歌謡。七七調または七五調の詩形が多く、同じ旋律を繰り返して歌う。踊りを伴うものが多い。口説節。

- 10-1 娘踊 昭和37(1962)年8月15日 喜多慶治撮影（喜多文庫）
- 10-2 男踊 昭和37(1962)年8月15日 喜多慶治撮影（喜多文庫）

### 〔主要参考文献〕

文化庁「国指定文化財等データベース」

兵庫県教育委員会『兵庫の民俗芸能』（兵庫県民俗調査報告7、昭和51年3月）

喜多慶治『兵庫県民俗芸能誌』（錦正社、1977年）

小栗栖健治・久下正史編『ふるさとの原像 一兵庫の民俗写真集一』（神戸新聞総合出版センター、2012年）